
いただきます。ごちそうさまでした。

逢恋想介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いただきます。ごちそうさまでした。

【Nコード】

N6373J

【作者名】

逢恋想介

【あらすじ】

1話あたり5分もあれば読める、短編と言うよりも掌編の作品集です。

連載となっていますが、1話ごとの繋がりはほとんどありません。

「食べ物」を題名と作品の中に置き、それと浅く深く、強く弱く絡めながら描いていきます。

ちなみに、カテゴリ的には「恋愛」ということになっていますが、そもそも何を持って恋愛というのか微妙なので、見る人によっては恋愛小説だろうし、見る人によってはそうではないかもしれせん

が…よろしく願います。

たこ焼き

ネギの味が口の中に広がったままでいる。

たこ焼きの上には潔い緑のネギと、頼りなく細いリボンのようなマヨネーズと、舞い踊る柔らかなかつおぶしである。

私は元々たこ焼きは好きではなかったのだが、智彦の焼く一味も二味も違うそれを食べてからは、見かけるとつい手に取ってしまうようになっていた。

たこ焼きが作り手によってデリケートに味が変わる食べ物だとは知らなかった。私の中の関西のイメージは、明るく小さな事に頓着しない豪傑さというものである。なので、たこ焼きもきつと、そういう味なんだろうと思っていた。そう智彦に言くと、「お客さん、そりゃ偏見ですよ」といつて笑った。アスファルトからの照り返しと熱気が猛威を振るっていた8月の初めのことだった。

それから次第に智彦は私のことを「お客さん」、「お姉さん」、「高濱さん」、「京子さん」と少しずつ呼び名を変えながら呼んだ。今は梅雨が明けてもうすぐまた夏が来る。私がたこ焼きと関西への偏見を止めて一年が経とうとしている。

智彦と会うのはたいいてい昼の間である。智彦にとっては昼の、私にとっては朝昼兼用の食事を取り、そのまま何ということもない世間話をして帰る日もあれば、連れ立って「城」へ行くこともあった。「城」というのは智彦がつけた呼び名で、最初「城、行く？」と聞かれた時は、小倉城にでも行くつもりなのかと思ったりした。しかし、そうではなく、「城」というのは田舎の「そういう場所」が、たいいてい間違ったイメージの中世ヨーロッパのお城みたいな外観をしていることからそう呼ぶのだった。いつだったか、「ここが城なら、私たちは王子様とお姫様なの」と智彦に尋ねると「王子と姫なら入るときも出るときもあんなにこそそそしないだろうね」と苦笑いをしながら答えたのを聞いて、私はなるほどなと思った。

今日は「城」へ行かない日だった。食事をして世間話をする、智彦が「今日は早めに店を開ける」と言うので、それに着いて行った。

智彦はたこ焼きを売っている。それも、夕方五時に店を開け、日付が変わるくらいまでという不思議な営業時間だ。それについては十五夜のころに尋ねたが、なんでも「オフィス街と盛り場の交差しているこの場所では、その時間に営業した方が都合がいい」のだそうだ。そう言われて考えてみると、この店に来るのは酔っ払いや残業中と思しきサラリーマンや、予備校帰りの学生ばかりだ。なんと理になかった営業時間だろうかとは私は感心したものだ。十五夜のころは、確か「お姉さん」と「高濱さん」の転換期だったような気がする。

私はたこ焼きのパックをそばにあつたゴミ箱にそつと捨てた。夏の夕方の公園は騒々しさと静けさの入り乱れた不思議な空間で、日は長いとは言え律儀に五時を過ぎると家に帰る子どもたちの声は聞こえなくなったが、しつこい蝉がいつまでも鳴いている。その声を聴くだけで、じつと汗が滲んでくるように思える。

智彦は私のことをどう思っているのだろうか。

そう自問しようとして、私は意識から離れていくようにと大きく何度か首を左右に振った。この問いを自分に投げかける度に悲しくなる。それはわかつている。わかつているのに投げかける。そして投げかけた後は必ずこうやってブルブルと首を左右に振る。

違うんです、違うんですよ。

私が考えようとしたのは、サバの味噌煮を編み出した人に対しての感謝の気持ちそれだけです。

私は勢いよくベンチから立ち上がった。ビルの陰に消えていこう

とする夏の夕陽を意味もなく力強く睨んだ。

弱くなったな…

自分でそう思った。

時計を見た。もうすぐ六時になるうとしている。急いで帰らないと夕飯の支度が間に合わない。買い物は昨日済ませてあったから大丈夫。昨日はサバが安かったのだ。

それ以上何も考えずに私は歩きだした。考え出すと泣きそうになるからだ。

智彦とは来週は会えないのだ。なんでも土曜日に授業参観があつて、店を開けることが出来ないから今週と来週は穴を埋めるために昼間も店をやるのだという。仕方ないことだ。

仕方ないこと、仕方ないこと…

私は意味もなく節をつけてそれを言葉に出してみた。短調の悲しげなハーモニーになった。

今日はいやに泣きたくなる日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6373j/>

いただきます。ごちそうさまでした。

2010年10月28日06時09分発行